

OMNIBUS

大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書室報

C O N T E N T S

命の危機管理～目の前で突然倒れたひとの最初の5分間の対応～〔富士原彰〕	2
米国の医学教育をみて思うこと〔宮本 学〕	3
SICK HOUSEからHEALTHY HOUSEへ - - 21世紀の医療環境 (15)〔牧 彰〕	4
耳が二つあるのは?〔森山幸子〕	5
新図書館システムが4月1日よりスタート	6
図書館利用状況	8
他大学図書館訪問記(19)(高知大学附属図書館医学部分館の巻)	9
書評「プロレス影の仕掛人; レスラーの生かし方と殺し方」〔覚野芳光〕	10
大阪市立大学学術情報総合センターを訪問して	11
本学教職員著作寄贈	13
お知らせ	13
平成16年度図書館合同運営委員会委員	13
平成15年度図書館統計	14
図書館業務日誌	15
編集後記	15



命の危機管理

～ 目の前で突然倒れたひとへの最初の5分間の対応～

富士原 彰



近年、高齢化、食生活の欧米化とも相まって、仕事上のストレスや過度の労働が誘因となって、脳卒中・心筋梗塞を発症し、急死するなどの重大な事態に至るケースの増加が社会問題となっています。動脈硬化年齢と言われる45歳以上の男性では、肥満、糖尿病、高血圧、高脂血症、いわゆる「死の四重奏」が音もなくメロディーを奏ではじめ、高濃度のインシュリンやだぶついたコレステロールが血管壁を痛めつけ、本人が気付かぬうちに立派な病気を作り上げています。働き盛りの中高年者におけるこの予備軍が問題なのです。

日常の救急医療現場において、突然に体調を崩し搬送されてくる患者様は脳卒中・心筋梗塞等の内因性の病気がその7割を占め、その年齢分布では、そのほとんどが50才代～70才代であります。大阪府全域（対象人口880万人）では、年間5000人の方々が、多くは自宅で、また職場や公共の場で心肺停止になり、蘇生処置が施行されています。このうち6割が心臓に問題がある心停止であり、年間人口10万人当たり30人強の人が死亡されています。

急死の原因である脳・心臓疾患については、発症するまでの段階での予防が大切であることは言うまでもありません。多忙な日常生活のなかで、われわれは如何に体脂肪を燃焼させる有酸素運動を組み込むかが重要な鍵になります。いろんな保健指導が行われています。

しかし、ご存知のように、2002年11月21日の高円宮殿下、23日の福知山および名古屋マラソンでのスポーツ中突然に死に至る事故が相次ぎ、中高年からの過激な有酸素運動のあり方にはあらためて警告が鳴らされています。

もし、身内が、友人が自分のみている前で突然にたおれた、そんな場面に遭遇したらあなたはどうしますか。目の前で突然たおれた人へのあなたの最初の対応こそが、その人の命を救います。命のパケツリレー（救命の連鎖）と呼んでいます。目の前でたおれた人を目撃したら、大声で肩を叩きながら呼びかけをして、119番通報をする。救急車が到着するまで人工呼吸、心臓マッサージを、救急隊に引き継ぎ、そして、病院へこのリレーがよどみなく行われれば、その人の命を助けられます。

現場から救命処置を行う体制、病院外救護体制が構築・充実するにつれて、助かる人が多くなっています。大阪府では、いままでなら3%程度であったのが、2000年では13%に、地域によっては20数%のともでてきています。こうした救命の連鎖を効果的に機能させるためには地域ぐるみの、職場ぐるみの取り組みが重要であります。

日ごろから、お互いの命を支えあう仲間意識を芽生えさせることこそが、良い社会環境づくりの第一歩であると信じます。

目の前で突然倒れた人への最初の5分間の対応

安全を確保して、3つの確認と3つの行動を

意識の確認 「大丈夫ですか」 「あなた！ 119番通報して」

呼吸の確認 頭部を後屈、あご先を拳上

耳を口元に、息をしているか「息をしていない」

2回ゆっくりと息を吹き込む

循環の確認 息、咳、体動がない「心臓は働いていない」

心臓マッサージと人工呼吸を15：2で絶え間なく

（ふじわら・あきら 救急医療部教授）

米国の医学教育をみて思うこと

宮 本 学

平成16年2月23日ホノルルで開かれたOsler in the 21st Century: The Principle and Practice of Clinical Trainingに参加しました。ハワイ大学医学部 (JABSOM) におけるPBLから臨床の場までの教育方法をみてきました。

最初の2日間で心構えから実際のテクニックまでを教え込まれました。もちろん小グループでの練習と討論が伴います。そして3日目の実技に挑むわけです。私たちは、KUAKINI MEDICAL CENTERにあるCCS (CENTER FOR CLINICAL SKILLS) と実際の4年生の学生と本物の? 模擬患者 (SP) をお借りして、学生への教育を体験しました。日本のように医療面接はSPを使い、身体診察は人形というわけではありません。ハワイ大学の育てた200人のSPは、学生に病歴も身体所見も取らせ評価してくれます。患者への対応の仕方、上級医への報告に至るまで細かく評価チェック項目が定められています。また、ビデオで採点し結果をフィードバックできるようになっています。Dr.KASUYAから、フィードバックの仕方とアイコンタクトを教えてもらいました。彼らは必ず誉めの言葉から入ります。誉めることがみつからず、「君はいい靴を履いているね」といった先生がいたそうです。

一例目は胆嚢炎のおばさんでした。組んだ女子医学生が実に美人で、まるでハリウッドの女優さんでした。いつもとは逆の立場なので緊張し、頭が真っ白になりしどろもどろになりました。何とか取り繕って、がっかりしていると、彼女がしきりに話し掛けてくれ、やっと落ち着きました。このとき、あなたのせいですよと言っていればもっと親しくなれたかもしれません。二例目は、脳梗塞の男性老人で娘役が付いている設定でした。娘は途中で文句をつけます。学生は4年生のMAXWELLでした。背の高いおっさんのマックに対しては終始優位な立場をとることができました。一問一答で相手の弱点を捜し指摘するのです。彼が脳神経検査で三叉神経の検査法を知らないのを攻めると、それなら先生が自分で試みてくださいますよとやり返すので、実際にしてみせました。彼はとても感心しました。日本の基礎医学の先生は、少なくとも米国の学生よりは出来ることを示しました。という訳で、マックとはいい友達になることが出来ました。(写真参照)



身長2mのマックと

1 - 2年はPBLによる教育です。この2年間に、病態生理、所見の読み方、患者への対応を含めた実際の診療に入るための紙の上での実習をします。3 - 4年では、アテンダントを中心として数名のチームの一人としてホノルル市内に点在する病院で、実際に診療するわけです。

JABSOMの学生はよく勉強します。一日3 - 4時間の睡眠で、お互いに勉強の話しかしません。MS1 - 2年で病歴や身体所見の取り方といった臨床技能の訓練もすでに始まります。STEP1 (日本の共用試験) は、その点数がマッチングに使われます。MS3 - 4年は実際の診療チームで卒業までに100人以上受け持つそうです。今年からSTEP2にCS (臨床技能) の試験が加わりました。マッチングも大変で、いい研修病院に行けなければ、自分の学校にしか残れないやつと言われるそうです。専門医でもより厳しい競争があります。彼らはいつの時点でもサバイバルをしているのです。もっとも日本の学生を米国に連れて行けば、同じくらい勉強するでしょうし、米国の学生を日本に連れて来れば、サボるでしょう。

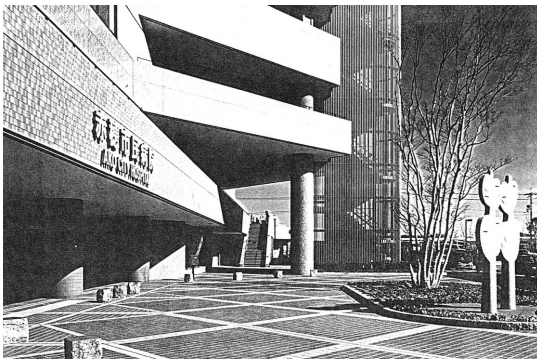
米国におけるPBLは、診療を見据えた問題解決とデジジョンメイキングの訓練です。CS (臨床技能) を経て実際の診療に直結しています。PBLからクリニカルクラークシップへの流れは決して切り離すことができない極めて実際的な流れであります。米国の制度を完全に導入できない理由に、学制が違うことがあります。米国の学生を見ると、どこまでもこのマイナス2年の差が残ると考え

るべきです。すなわち、メディカルスクール構想無しでは米国の各制度を入れることはできないのです。しかし、同時に競争原理からなる米国の文化も受け入れなければならないと考えます。PBLで、日本の学生と米国では医学へのモチベーションが違う、答えのない問題に対応できない、文献を捜して読む能力がない、ディベートやプレゼンテーションの訓練がされていないなどの問題点ばかり強調されます。モチベーションを持つ背景がないからだと思います。メディカルスクール構想のなかで、独自性を如何に保つ事ができるかを考える時代が来ていると思います。

(みやもと・まなぶ 第一生理学講師)

SICK HOUSEからHEALTHY HOUSEへ - - 21世紀の医療環境 (15) - - (病院) (健院) 牧 彰

人みな花に酔う桜の季節も早々と過ぎ去り、木々の梢も日増しに緑を濃くして野山に生命の息吹がほとばしる陽春の候となりました。



「もてなし」の心が嬉しい赤穂市民病院玄関前広場

日本では、冬季に葉を完全に落として裸木になる樹種を落葉樹、四季を通じて葉を繁らせている樹種を常緑樹と呼びます。常緑樹は新しい葉が芽生えてから古い葉を落とすため、落葉樹ほど葉の入れ替えが目立ちません。したがって、常緑樹の対比としての落葉樹の呼称は、極めて不適切であるといえます。紅(黄)葉しない樹種はあっても、「落葉しない樹木などは存在しない」からです。

多くの日本人は「常緑樹は落葉しない樹木である」と錯覚しています。植栽計画のプレゼンテーション時にはきまって依頼主側から、「落葉樹は落ち葉の清掃が難儀なので管理上困る」などの婉曲な苦情があり、当方の真摯な説明・説得にも納得されないことが多々あります。落ち葉を掃き集めて芋を焼く初冬の風物詩も、かなり昔に廃れてしまいました。燃料や肥料としての役目を終えた落ち葉は、今では街を汚す塵芥扱いです。事物の本質を的確に表し得ない言葉は、漢字(表意文字)の国・日本ではとかく誤解を招き事態を混乱させるだけです。すべからく適切な表現に改めたいものです。

HOTELとHOSPITALの語源であるラテン語のHOSPESは「人をもてなす」ことを意味していますが、現代日本の医療・福祉施設の事態はその本意からあまりにもかけ離れています。

文明開化の明治期に、HOSPITALの翻訳語として[病院]の二文字を当てた裡には、病院への国家的な差別意識が歴然と伺えます。そこにはECONOMYを[経済(経世済民・世を経め民を濟う)]としたような高遠な理想や真摯な気概が全然感じられません。[脱亜入欧]を国是とし、過去の重農思想から産業・経済を最重視した[近代的技術立国・日本]への道を闇雲に突き進んできた時代には、国家にとって病人などの弱者は大いに厄介な存在であったことでしょう。長期に渡り不当に差別され続けてきたハンセン病患者も、最近やっと国の差別政策から解かれて陽の目を見ることができました。[病院]という前近代的な呼称は、今世紀日本の医療環境を向上する妨げにもなり、今後の国際社会で欧米などの先進的医療・福祉国家と対等に伍してゆくための暗黙の足枷になっていると思えるのです。

病院を意味するままに解釈すれば病の館であり、そこには本来この施設に必要な不可欠なHOSPITALITY(もてなしの心)などは微塵も感じられません。病の館を英語に直訳するとSICK HOUSEであり、原語のHOSPITALとの彼我の差には唯々啞然とさせられます。病人などの弱者を

社会的に差別し隔離する病院は、病人を作りはしても「患者の心身を励まし、癒し、治す」心の籠った医療施設にはなり得ません。それとも、南北朝の動乱を詳らかに描いて『太平記』とした日本人特有の風刺・諧謔精神として考えたら良いのでしょうか。

患者への人権軽視とあまりにも佻しい医療・療養環境のために、欧米人は日本の病院に行きたくありません。日本医療の真の国際化のためにも、患者のストレスが益々増すようなSICK HOUSEから、真にストレスを解消できるHEALTHY HOUSEへの転換が急務といえるでしょう。「弱者を労わる心は人間だけに共通する感情であり、人類が万物の霊長である証」なのです。今世紀における日本の医療環境向上のためには、医療の原点である〔もてなしの心〕に着目し、まずは事物の本質を的確に表し得ていないこの時代錯誤の翻訳語〔病院〕を速やかに改めたいと思うのです。

環境の世紀・人権の時代を標榜する今世紀は、医療の分野でもグローバル・スタンダード（国際基準）を規範としなければなりません。わが国だけの医療事情はもはや通用しないのです。立ち遅れた日本の医療・福祉環境を国際水準にまで高めるために、この人の幸せを追求する〔究極のサービス業〕に最もふさわしい文字通り「名が体を表し、患者の心に真に叶う」レトリック（修辞法）が切に希求されています。

（まき・あきら 建築家 元日建設社員 本学総合研究棟・本館・図書館棟設計担当）

耳が二つあるのは？

森山幸子

我が家のテーブルに「一日一話、寝る前に読むクスリ」と銘打った、文庫本が置いてあります。企業向けのサラリーマンへのものなのですが、中に外国の格言を紹介しているものがありました。「人間には、なぜ口が一つなのに、耳は二つついているのか。それはしゃべることの倍、人の話を聞くためだ。」と言うものです。格言からの話はさらに続きます。人はある程度の自信がつくと、「自分のやり方が絶対だ」と思い込み他人の意見が聞こえなくなる。すると、日々変化する世の中に対応できないまま、前回成功したときと同じ方法を繰り返し、失敗することとなる。しかし、“本物”はそうならない。その“本物”として、本田宗一郎氏の姿を上げています。本田技研の副社長を務めた西田氏は「本田さんは、『日々新たなり』と繰り返し言っていた。それでもやはり、つい耳を閉ざして自分勝手に走ろうとすることがある。そういう時私達が止めに入ると、『うん？ そうかな』と立ち止まり、必ず戻って来てくれた」と言うものです。

企業社会のものですが、反省させられる思いになりました。私にしっかりと「人の話を聞く」ことが出来ているのか。「あっ、そうだな」と素直に耳を傾けているのか。耳を傾けられない自分を省みる行動を起こしているのか・・・と考えると、恥ずかしくなります。

私自身ただ自分のやることしか見えない時があり、せっかく進言してもらえたのに大切な糧を自分で駄目にしてしまっている。それだけではなく、さらに今までの関係に自分で壁を作る結果をも招いてしまう。どうしてこんな分かりきった事が出来ないんだろう。この本の著者は、「ありふれたことかもしれないが、これがなかなか難しい。人間にはほとんど本能的な自己防御の性質がある」と説明しています。しかし“本物”とされる人は、この本能的な自己防御を乗り越え、みな「聞く耳」を持っていると言うのです。本能に逆らって自分を省みるのは本当に難しい。ましてや日常のやり取りの中で瞬間にもその「聞く耳」を自分に課せるのは・・・これはもう“本物”となるための厳しい条件とも言えます。

中学の頃、担任の先生は進路指導担当も併せ持っておられました。その先生に進学高校の相談にのって頂いたのですが、いつも呪文のように繰り返す言葉がありました。30年経った今でも、本屋へ行くと習慣のごとく浮かんできます。「家は借りて住め。本は買って読め。」おそらく当時から、

ものごとに興味・関心が向くとそのまま走ってしまう性格を見抜いておられたのでしょうか。いかにも危ない感じだったと思います。そんな状態が、じっくりと文字を吸収しながら回避できるよう、いつでも繰り返し読むために「・・・本は買って読め。」と諭して下さっていたのだと思います。文字により認識される時間が、自己防御の反応を緩慢にする、その効果を狙っていたのだと気づくのに、随分と時間がかかってしまいました。(先生、すみません)

看護の領域には「人の話を聞く」と言う行為があります。ごく自然にあたりまえの行動としてクライアントの言葉を受容していく「傾聴」です。クライアントの話をしっかりと聞き、じっくりと咀嚼し、正確に掴む。そして、その気持ちを慮り理解していく。

とても大切なことを何度となく教えられ、また、教えていながら実際に自分の行動として行なうことがいかに難しいか実感します。クライアントと接している時にはそれでも意識できているのですが、いざクライアントから離れ自分の生活へ移ると、「耳が二つある理由」から離れてしまう自分を認めざるを得ません。しかし、中学の頃の私より「聞く耳」を持つ瞬間は多くなっているはず

“本物”になれるのか、これからの瞬間々の自身の「耳」に課せて行こうと思います。

(もりやま・さちこ 看護専門学校専任教員)

新図書館システムが4月1日よりスタート

平成16年4月より、図書館システムが新しくなりました。従来のLibVision ver. 2からバージョンアップしたLVZシステムです。以下にその概要を紹介します。

1. 新図書館システム「LVZ」の特徴

- 1) 多言語対応 UCSコード対応により、諸言語が表記できます。ドイツ語や中国語の資料も日本語の資料と同じように検索できるようになります。
- 2) ハイパフォーマンスな全文検索エンジンNSEARCH が採用されており、多言語にも対応し、任意の文字列であいまいな検索ができるようになりました。
- 3) 所蔵目録検索を充実し、各種サービスを開始しました。従来のOPAC機能をより分かりやすくし、通常のWebブラウザでの検索と差異のないものとししました。またWeb上から文献複写申し込みや、借出し情報の確認、図書館で備えてほしい資料の購入希望、投書・参考質問ができるようになりました。

2. 新図書館システム「LVZ」のサービス紹介

図書館内の利用者端末や、ホームページ上の所蔵目録検索と学内限定各種サービス・申込のページ(図1)から、新しいサービスが利用できます。

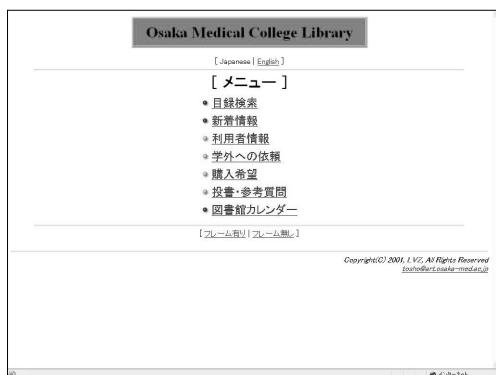


図 1



図 2

- 1) 所蔵目録検索。従来のOPACをより簡素にわかりやすく、また検索しやすくしました(図2)。検索は通常のWebブラウザでの検索のように、キーワード欄に複数の単語をスペースで区切り入力することにより掛け合わせの検索ができます。単語の前に「」を入力することで前方一致検索、「」を入力することで後方一致検索ができます。タイトルや著者名を組み合わせた複合検索もできます。雑誌の特集記事を探すためには雑誌記事検索をご利用ください。いずれの検索も図書館にある資料か、教室にある資料か限定することもできます。
- 2) 新着情報。受入の新しい資料から、1週間・2週間・1ヶ月・2ヶ月・3ヶ月と期間を区切って、一覧表示します。一覧の中から個々の資料の内容を確認できます。図書・雑誌・和資料・洋資料と資料を限定することもできます。所蔵目録検索にも共通しますが、その資料の所在や貸出中であるか否かも同時に表示されます。
- 3) 利用者情報。利用者情報以下、学外への依頼、購入希望、投書・参考質問を利用する際には、認証画面でユーザーIDを入力していただく必要があります(図3)。教職員の方は職員証の職員番号を入力してください。学生の方は図書館内の利用者端末に設置した、磁気リーダーで学生証を読み込ませてください。また、文献複写申し込みのためにパスワードを設定された方は、各サービスにおいてもそのパスワードを入力して下さい。利用者情報では、ご自身が借出されている資料の確認、資料購入希望の申込み情報、文献複写依頼の申込み情報が確認できます。



図3



図4

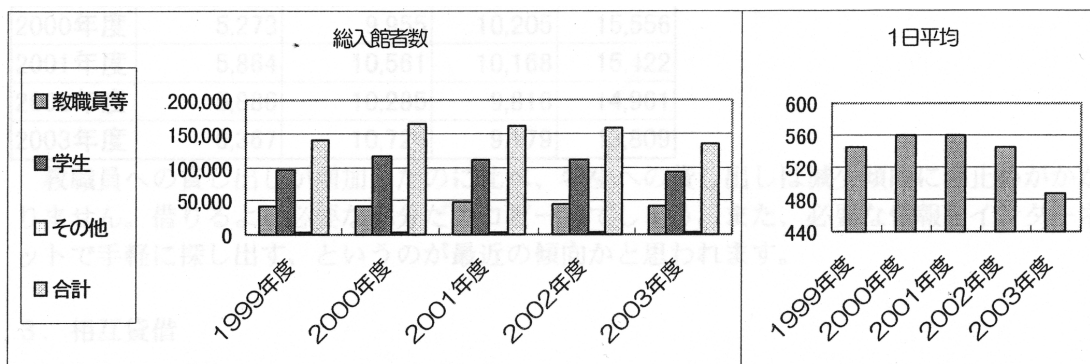
- 4) 学外への依頼。学外への依頼とは本学図書館に無い文献資料を、他の図書館から複写物を取り寄せたり、現物を借用するといった文献情報申込みのことです。学内のメールアカウントがある教職員が利用できます。必要事項をWebページの画面から入力し、申込みボタンをクリックすることで、図書館に来なくてもこのサービスを利用できます。資料の到着の連絡は、ご指定されたメールもしくは電話でいたします。
- 5) 購入希望。図書館で備えてほしい資料の購入希望を申し込んでいただけます。画面の指示通りに必要事項を入力し、申込みボタンをクリックしてください。購入の可否はご指定されたメールもしくは電話でいたします。
- 6) 投書・参考質問。図書館への投書や質問をお受けいたします。原則として投書は特に返答を要しないもの、質問は返答を要するものとさせていただきます。
- 7) 図書館カレンダー。図書館の休館日や無人開館のみの日をお知らせします(図4)。その他図書館の開館について、お知らせがある時には特記いたします。

以上、新システムについて紹介いたしました。この新システムをご活用いただき、よりいっそう図書館をご利用いただきますようお願いいたします。

図書館利用状況

(1999年度～2003年度の推移)

1. 入館者数



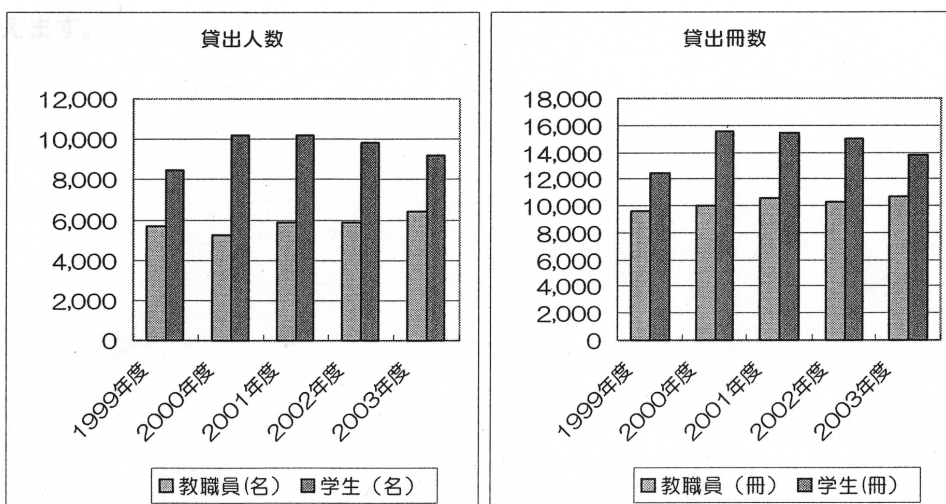
	教職員等	学 生	その他	合 計	1日平均
1999年度	42,468	96,546	2,730	141,744	545
2000年度	43,180	116,293	3,299	162,772	559
2001年度	47,264	111,268	3,728	162,260	561
2002年度	45,423	110,370	2,133	157,926	545
2003年度	40,635	92,943	1,678	135,256	488

2003年8月下旬から10月にかけて、入館者数計測システムが不調をきたしたため、人数のカウントができませんでした。また、9月以降は、平日午後9時から11時、土曜日午後4時から9時および日・祝日午前9時から午後9時を無人で開館することになったので、開館時間が大幅に増えました。これらのことから入館者数は単純に比較できません。

ちなみに、前半・後半に分けて前年度と比較してみると次の表のようになります。

	2002年度		2003年度	
	4月-7月	11月-3月	4月-7月	11月-3月
学 生	31,725	49,780	35,368	53,702
教職員	14,438	18,397	18,243	19,249
その他	1,407	1,103	1,301	294

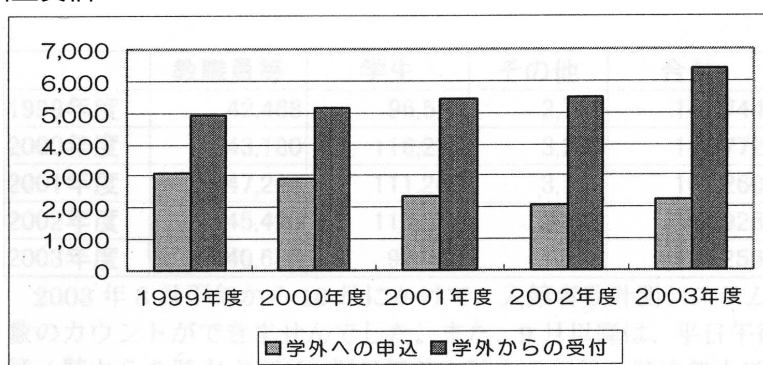
2. 貸し出し



	教職員(名)	教職員(冊)	学 生(名)	学 生(冊)
1999年度	5,670	9,637	8,484	12,473
2000年度	5,273	9,955	10,205	15,556
2001年度	5,864	10,561	10,168	15,422
2002年度	5,886	10,285	9,816	14,961
2003年度	6,367	10,724	9,179	13,809

教職員への貸し出しが増加したのに比べ、学生への貸し出しは減少傾向に歯止めがかかりません。借りるより必要な部分だけコピーしてしまう、また、必要な情報をインターネットで手軽に探し出す、というのが最近の傾向かと思われます。

3. 相互貸借



	学外への申込	学外からの受付
1999年度	3,091	4,909
2000年度	2,890	5,144
2001年度	2,375	5,438
2002年度	2,066	5,480
2003年度	2,248	6,385

減少傾向であった学外への申込が増加しました。予算の逼迫で十分な資料を購入することが難しくなり、学外に頼ることになったというのが要因の一つと考えられます。それは逆に学外からの受け付けが増加していることで、何処も同じ悩みを抱えていることが窺えます。

他大学図書館訪問記 (19) 高知大学附属図書館医学部分館の巻



図書館全景

高知大学附属図書館医学部分館は高知大学医学部内にあり、高知県南国市の西端に位置します。公共交通機関の利用は高知市内が起点となり、JR高知駅より東方面にバスで30分の所要となります。高知大学医学部は一県一医大(無医大県解消)構想によって、昭和51年10月に高知医科大学として設立されました。昭和53年度に1期生を迎え、平成10年には看護学科を設置。その高知医科大学は平成15年10月に国立大学の統合化により、高知大学と統合されて、高知大学医学部となりました。

図書館は当初講義棟の一部に開設され、昭和55年に図書館棟が竣工し高知医科大学附属図書館として同年7月に開館しました。大学の統合により平成15年10月から、中央館・医学部分館・農学部分館から成る高知大学附属図書館の一員となりました。

図書館棟は大学側研究棟や実習棟と病院側病院棟との間にありキャンパスの中心部に位置し、時計台を備えた2階建てで面積は1,744m²あります。図書館棟1階入口は建物の正面となる南口と、他の建物群から便利な北口の2ヶ所あり、利用カウンターは正面口にあります。両入口にはブックディテクションシステムが導入されています。両入口を結ぶ通路沿いにOPACコーナー、Web利用のためのパソコンコーナー、複写コーナー、そして新聞閲覧コーナーが並びます。1階部分の資料配架は雑誌



メインカウンター

となっており、新着雑誌架、閲覧室があり、電動集密書架に欧文雑誌バックナンバー、邦文雑誌バックナンバーが各々配架されています。グループ学習室2部屋もこの階にあります。カウンター前の階段を上がると、光庭のあるブラウジングコーナーです。2階部分の資料配架は図書となっており、建物西側には基礎医学系図書、医学系参考書、内科系図書、外科系図書、看護系図書があり、閲覧スペースや情報コンセント設置済みのテーブルもあります。DVD・ビデオテープ視聴可能な個室も5部屋あります。建物東側には一般図書、閲覧室、一般参考図書があり、一部雑誌のバックナンバー室に利用されています。その他軽い読み物をおいた休憩コーナーもあります。

図書館の開館時間は、平日は午前9時から午後8時まで、土曜日は午前9時から午後4時30分までです。平日の午後8時から翌午前2時まで、土曜日の午後4時30分から翌午前2時までと、日曜日・休日の午前9時から翌午前2時までは、自動入退館システムにより教職員（平成15年度対象数1,461名）並びに学生（平成15年度対象数1,076名）が利用できます。休館日は12月29日～1月3日です。図書蔵書数は平成15年度末で、図書134,000冊、雑誌約3,000種の蔵書があり、年間図書を約4,000冊、雑誌を約1,300種受け入れられています。館外貸出は約18,000冊で、図書館間の文献相互利用は、受付5,253件、依頼4,570件でした。オンラインデータベースでは、医中誌Web、CINAHL、Cochrane Library等を契約されており、電子ジャーナルは、医科大学図書館時よりScienceDirect、ProQuest、Synergyを契約しており、統合後大学全体でSpringer Link、Kluwer Online、InterScience（Wiley）等が利用出来る様になりました。百科辞典・辞書・アトラス等のCD-ROM資料も利用出来ます。

今後図書館の課題としては中期目標・中期計画のもと3本の柱として、1)教育支援では情報リテラシーの強化と、それに伴う講習会の開催やガイダンスの充実。2)研究支援では電子的資源の充実。3)社会との連携では、現在学外者にも学内者と同様に貸出サービスを計る事で対応したが、医療従事者の方への情報収集活動支援を計ることが挙げられています。また、資料収容スペースも逼迫しており、図書館として維持し続けなければならない資料の収容をいかに行なうか差し迫った問題となっています。

高知大学附属図書館医学部分館のURLは <http://www.lib.kochi-u.ac.jp/igaku/index.html>で、このホームページから多くの図書館サービスが発信されています。（宮本）

書評

プロレス影の仕掛け人；レスラーの生かし方と殺し方

ミスター高橋 著 講談社+ 文庫 2004

覚野芳光



「プロレスは真剣勝負だ」という人もいれば、「いや、八百長だ」という人もいる。長い間なされてきた議論である。「プロレスは八百長か否か」この問いに対して、明快に回答してくれたのが本書である。

内容は、著者の言葉を借りれば、「プロレスが、マッチメイカーら影の仕掛け人たちによって、どのようにつくられていくのか」が書かれている著作であり、

その基本スタンスは、「プロレスはプロレスなのであり、筋書きのあるエンターテインメントだからこそ面白い」というものである。要するに、「プロレスは八百長である」と胸を張って言い切った著作である。

学術論文風というと、本書のKey Wordは、「アングル」「マッチメイカー」となるだろうか。英語のangleという言葉にその意味が含まれているかどうかは不明であるが、本作中での「アングル」とは、予定調和、予め作られたシナリオ、出来レースのような意味で使われている隠語である。そしてその「アングル」を考えるのが「マッチメイカー」である。

著者は、レスラーであった時期もあり、その後は新日本プロレスで20年にわたり、レフェリーとマッチメイカーをつとめたミスター高橋。プロレスファンなら知っている人も多いただろう。プロレスの裏も表も知り尽くした当事者が書いた作品である。

いわゆる「暴露本」といわれる著作物の多くは、著者が外部の者であれ、内部の者であれ、その対象について、「この業界はこんなひどいことが平気でなされている」「この人は裏ではこんな悪いことをしている」という趣旨で書かれている。しかし、本書の場合、著者は現役レフェリーを退いた今も、プロレスをこよなく愛しており、その愛ゆえに、現在のプロレス人気の凋落を、親心にも似た感情で憂いている。そのプロレス界を何とか救おうと、プロレスのために思って書かれた作品である。その点で通常の暴露本とは大きく異なる。また、ガチンコ勝負（真剣勝負のこと。）とプロレスを対比し、「エンターテインメントとは何か」という考察は鋭い。

本作の楽しみ方は読者によっていろいろであると思われる。表紙からして、若き日のアントニオ猪木、ジャイアント馬場を中心に、周囲には大仁田厚、天竜源一郎らの顔ぶれが並ぶ。こちらに背を向けている坊主頭はアブドーラ・ザ・ブッチャーか。文中には他にもスタン・ハンセン、タイガー・ジェット・シンなど、懐かしい名前がたくさん登場する。そういったノスタルジーに浸るのも良いだろう（いまだに現役選手もいるが）。また、流血も因縁も抗争も、すべて「アングル」であったという事実や、実際のレスラーの性格・個性、予定調和であったはずの「アングル」の全てが予定通りに進んだわけではないことなどが、著者の人柄もあるのだろうが、面白おかしく、テンポよく語られている。一気に読んでしまえる作品である。

熱烈なプロレスファンであっても、何となくモヤモヤとした疑問というのがあると思う。例えば、レフェリーの不均等・不公平なカウント、また、抗争しているはずのレスラー同士が同一団体に所属していること、などであるが、本書を読むことで全て納得がいく。全て「アングル」だったのである。自分は物心ついた頃にはテレビが当たり前に存在した世代なので、「やらせと分かっているも観たい」という心理が既にあり、「畜生、騙しやがって!」という腹立たしさよりも、「視聴者をこれだけ欺いたレスラー達はやはり偉大だった」という感想を持った。プロレスを真剣勝負ではなく、エンターテインメントとして考えれば、「アングル」を予想するもよし、素直に「アングル」に騙されるもよし、と思う。真剣勝負が観たい時は、他の格闘技・スポーツを観ればよい。それぞれ娯楽チャンネルの一つとして、あまり硬いことを考えない方が楽しいと思う。エンターテインメントに対する新しい見方を与えてくれる作品と考える。

（かくの・よしてる 第2病理学教室大学院生）

大阪市立大学学術情報総合センターを訪問して

大阪市立大学学術情報総合センターは、1996年（平成8年）3月に竣工し、同10月にオープンされました。旧図書館の新営に伴い、従来あった計算センターと図書館の一体化を計り、図書と情報の館として構想されました。

建物は地上10階、地下4階の計37,434m²で、収容可能冊数は約300万冊です。

センター開館時間は、平日午前9時から午後10時まで、土曜日午前10時から午後5時までとなっています。

1階のセンター玄関を入ると自由学習コーナーや、談話・ビジュアルコーナー、カフェテリア、展示コーナー、インフォメーションカウンターがありセンターに入館することなく利用することができます。センターへの入館はIDカードを使用し、入館ゲートを通して入ります。

2階はレファレンスゾーンとしてメインカウンター、レファレンスカウンター、参考図書コーナー、OPACコーナー、CD-ROMコーナー等がありライブラリーサービスの総合窓口となっています。

3・4階は図書閲覧ゾーンとして、学習用図書、教養図書と学習用雑誌が閲覧でき、閲覧席が550席設置されています。

5階はマルチメディアゾーンで、ビデオ・CD等のAV資料やCD-ROM等の電子資料を利用できる90席のメディア室や70席のAVホール等があります。

6階は事務管理ゾーンとしてセンターの事務室等があります。

7階は研究・閲覧ゾーンで研究用図書や貴重な文庫のコレクションが置かれた利用書庫、文庫書庫があります。

8階は特殊資料ゾーンとして特殊資料書庫、貴重書庫等があります。

9階は情報処理センターゾーンとしてパソコンの利用が可能な50席の情報処理演習室や情報リテラシー教育などの授業等が行われる50席の端末室2室等があります。

10階は研究・交流ゾーンとして会議室や研究者交流室等があります。

地下1階は雑誌センターゾーンとして、新着雑誌約6,000タイトルと国内外の新聞約50紙を展示している雑誌閲覧室や、利用度の高い雑誌の最近のバックナンバーを配架した雑誌利用書庫となっています。



情報処理教育実験室

地下2・3階はデポジットゾーンで、図書および雑誌のバックナンバーが電動集密書架に保存されています。

センターには、図書館情報学部門・ネットワーク部門・コンピューティングシステム部門・データベースを含むメディアシステム部門の4分野において合計12名の教員が所属（兼任）されて、一般情報処理教育や情報基盤支援等を担当されています。

メディア室や情報処理教育実験室、雑誌利用書庫等への入室に際しては、入館時と同様にIDカードによる入室システムを採用されています。

図書や雑誌を積んだワゴンを自動的に所定の場所まで運ぶAGVシステムが設置されています。

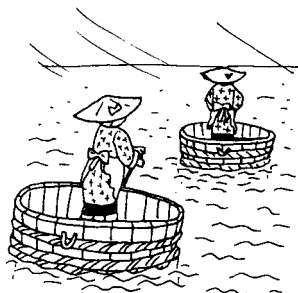
図書館と計算センターの統合によるメリットとしては、同一の建物に両方の施設があることによって教員との意思疎通が図りやすいことが挙げられます。

本学においても、大学の情報環境の整備において、図書館と医学情報処理センターとの統合も視野に入れた将来構想の検討等が行われています。



全景

(福広)



本学教職員著作寄贈

勝岡 洋治（泌尿器科学）

泌尿器疾患の最新医療 / 勝岡 洋治他編 先端医療技術研究所 2003

黒岩 敏彦（脳神経外科学）

脳神経外科：手術手技の基本 / 黒岩 敏彦監訳 金芳堂 2003

竹中 洋（耳鼻咽喉科学）

コア・ローテーション耳鼻咽喉科・頭頸部外科 / 竹中 洋他編 金芳堂 2003



1. 図書館システムが新しくなりました

- ・図書館システムの更新により、従来のバーコード式の図書館カードは使えなくなりました。図書館への入館および資料の貸出には、大学発行の「職員証」「学生証」をご利用いただきます。入館時には職員証・学生証の磁気面（裏側、黒いテープのある面）を左に向け、

リーダーのスリットに差し込み、手前に引いてください。OKの表示ができればバーを押して入館してください。

- ・旧カードは、各自ご処分ください。（カウンターに回収ボックスを用意していますので、こちらでもご利用ください）
- ・稀に入館登録のもれている方があります。特に新しい職員の方に多いので、人事課で職員証を受け取られましたら、なるべく早く図書館への登録の有無を確認においでください。

2. 職員証・学生証をお持ちでない方へ

図書館への入館用カードを発行いたします。但し、このカードは作成料が必要となります。作成方法、料金など詳しいことはカウンターにお問い合わせください。

3. Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States online が復活契約されました。

2003年に online を中止した PNAS の online Journal が2004年より復活して利用可能になりました。

平成16年度図書館合同運営委員会委員（平成16年4月1日）

図書館長 清水 章（病態検査学） / 基礎系 林 秀行（医化学） 岡田 仁克（第二病理学） / 社会系 河野 公一（衛生学・公衆衛生学） / 臨床系 黒岩 敏彦（脳神経外科学） 勝岡 洋治（泌尿器科学） 足立 至（放射線医学） 福田 彰（第一内科学） / 学生部 大槻勝紀（第一解剖学） 清金 公裕（皮膚科学） / 総合教育系 岡崎 芳次（生物学） / 看護専門学校 城戸 滝江、明田 朋子 / 図書館 茂幾 周治、福広 利明、松本 玲子

平成15年度図書館統計

平成16年3月31日現在

年間受入図書及び製本冊数

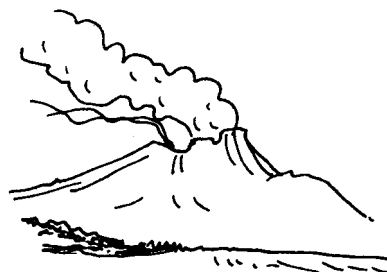
	購入図書		製本雑誌		寄贈図書		計		合計
	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	
図書館	992	258	1,541	1,223	198	45	2,731	1,526	4,257
教室図書	23	2	0	2	0	0	23	4	27
研究費	339	364	0	28	0	0	339	392	731
合計	1,354	624	1,541	1,253	198	45	3,093	1,922	5,015

カレント受入雑誌数

	購入		寄贈		計		合計
	和	洋	和	洋	和	洋	
図書館	323	444	790	35	1,113	479	1,592
研究費	3	3	0	0	3	3	6
合計	326	447	790	35	1,116	482	1,598

蔵書冊数

	図 書			雑誌（所蔵タイトル数）		
	国内	外国	計	国内	外国	計
本 館	98,554	99,782	198,336	2,516	1,769	4,285
合 計	98,554	99,782	198,336	2,516	1,769	4,285



図書館業務日誌

平成15年11月

- 6日(木) Mitani Solution Fairに館員参加(於、キャンパスプラザ京都)
- 7日(金) 医図協理事会・評議員会(於、慈恵医科大学)
第2回ライブラリーコネクトセミナーへ館員参加(於、京都リサーチパーク)
- 11日(火) - 14日(金)
大学図書館職員講習会に館員参加(於、大阪大学)
- 19日(水) - 21日(金)
第10回医学図書館研究会・継続教育コースに館員参加(於、日本歯科大学)
- 20日(木) 図書館合同運営委員会(於、図書館会議室)
- 27日(木) Cochrane Library利用説明会(於、図書館会議室)

12月

- 3日(水) 近畿地区医学図書館協議会シンポジウムに館員参加(於、関西医科大学)
- 5日(金) 館報第25号発行
- 15日(月) 医図協企画・調査委員会(於、本学図書館)
- 18日(木) 図書館合同運営委員会(於、図書館会議室)

平成16年1月

- 14日(水) 新図書館システム(LVZ)打ち合わせ会(於、図書館会議室)
- 19日(月) 近畿地区医学図書館協議会例会(於、奈良医科大学)
- 22日(木) 図書館合同運営委員会(於、図書館会議室)
- 23日(金) 医図協理事会(於、慈恵医科大学)

2月

- 2日(月) 新図書館システム(LVZ)打ち合わせ会(図書館会議室)
- 6日(金) 医図協企画・調査委員会(於、本学図書館)
- 19日(木) 大阪市立大学学術情報総合センター見学(7名)
- 23日(月) 医学情報処理センターUser会(於、第二会議室)
- 26日(木) 医図協総務会(於、中央事務局)

3月

- 4日(木) 医学情報処理センター運営委員会(於、第二会議室)
- 8日(月) 新図書館システム(LVZ)打ち合わせ会(於、図書館会議室)
LVZ機器搬入
- 18日(木) 図書館合同運営委員会(於、図書館会議室)
- 22日(月) マレーシア研修員見学来館
- 29日(月) 新図書館システム本格稼働

4月

- 2日(金) 新入職員図書館オリエンテーション
- 8日(木) 新入生図書館オリエンテーション(於、北西キャンパス)
- 9日(金) 医図協拡大総務会(於、中央事務局)
- 14日(水) 看護専門学校新入生図書館オリエンテーション(於、大研修室)
- 22日(木) 図書館合同運営委員会(於、図書館会議室)
- 23日(金) 医図協理事会・評議員会(於、東京慈恵医大)

編集後記

今回のトップ記事は、富士原彰教授にお願いしました。また、エッセイは宮本学先生に、執筆して頂きました。21世紀の医療環境のシリーズは、15回目になります。今号は、新年度の始めになりますので、「図書館利用状況」「図書館統計」等を掲載いたしました。その他、多くの方に執筆して頂き、有難うございました。表紙のカットは、北村達郎氏に描いて頂きました。読者の方の投稿を歓迎いたします。

(茂幾)

OMNIBUS「大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書館報」

No.26号 2004年 5月28日 発行

編集・発行 大阪医科大学図書館

〒569-8686 大阪府高槻市大学町2 - 7

TEL (072) 683-1221

(内線2799, 2621)

印刷 大日本印刷株式会社